

かずさの博物誌

ホオジロの四季

～澄んだ美しい鳴き声～

文・写真／成田篤彦

2014.5.20

春、台地の草原

水田から台地上った。チガヤやスギナやカラスムギなどが、一面に生えていた。モンシロチョウがタンポポの花の蜜を吸っていた。チツチツ、チツチツ、チツチツと鋭く澄んだホオジロの普段の鳴き声があった。新芽が萌える枝にホオジロが一羽止まっていた。ほほが薄い赤褐色、ホオジロの雌だ。シャッターを二回切るとさつと飛び去った。



▲ホオジロのオス＝2014年4月22日 木更津市

©成田篤彦

©成田篤彦



▲ホオジロのメス
＝2014年4月22日 木更津市

台地から谷津田に降りた。途中、チョッチーピーツツチョーピーツクと雄のさえずりが聞こえた。谷津田全域に響き渡る、声高で複雑な鳴き声だ。まるで大きめの鈴を強く激しく振ったような声だ。麓の竹林の背丈の高い枝先で、くちばしを天に向け大きく開いて、鳴いていた。

この鳴き声が、花にことよせて源平つつじ白つつじとか男子の手紙の書き出しに使う一筆啓上仕り候（簡単に申し上げるとの意味）や侠客が幅をきかせている地方ではテツペン一六、二朱負けたと聞こえると言う。だが、どれもしっくりこない。「自分にはどう聞こえるのか？」と鳴き声をカタカナで野鳥に書き始めた。だが、鳴き方が速くて書けなかった。

雌も雄も羽毛の乱れがなく、地味な羽色だ。だが、青空と新緑の中で、淡い赤味を帯び、草息で霞がかかっている、上品な美しさを感じた。

夏の終わり、海岸のヨシ原

猛暑で、誰もいなかった。ホオジロがバツタの幼虫をくわえて、電線に止まっていた。道に巣立ちしたばかりの幼鳥がいた。近寄っても逃げない。ホオジロの雄が目の前のクズの蔓（つる）でさえずった。

思ったよりもはるかに近い。ほぼ黒色と茶の羽毛のコントラストが強く鮮やかだが、羽毛がぼろぼろであった。繁殖が終わり、羽が生え換わる時期かと思った。

秋～冬

土手道の電柱下の草原にじっとしている雄がいた。この時期、草藪に数

羽で、チツチツ、チツチツと鳴き交わし、舞い上がる姿を見かける。

ホオジロの鳴き声は春に聞くと里山の命の息吹を感じる。夏に聞くと猛暑が和らぐ。冬は枯れ野の物悲しさが際立つ。

四季を通して、上総でもホオジロの美しい鳴き声を楽しめる。だが、残念ながら、一昔前と比べると見かける機会が少なくなった。



▲さえずるオス＝2013年8月26日 木更津市

©成田篤彦



▲ホオジロの幼鳥＝2013年8月26日 木更津市

©成田篤彦

memo

ホオジロ

スズメ目ホオジロ科

千葉県指定要保護生物。全長十七センチ。シベリア南部からモンゴル、中国、日本などに生息。上総の集落周辺の林縁や低木に生息。地上で主に草の実を採食する。越冬期、数羽の群れを作る。近年数が減少した。

参考文献

- 千葉県 千葉県の保護上重要な野生生物
- 二〇一一年 千葉県。中坪礼治一
- 九六七NHK日本の野鳥。